

気候変動による柑橘類への影響

浮皮果（左）と正常果（右）



日焼け果



裂果



写真 愛媛県農林水産研究所果樹研究センター



えひめの未来を考えよう！

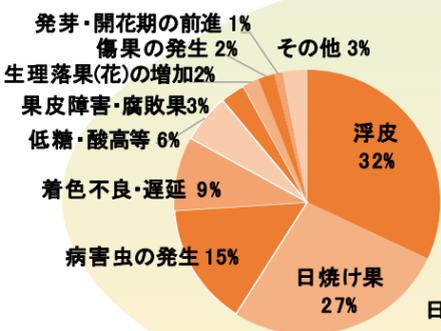
気候変動の話

～柑橘類への影響～

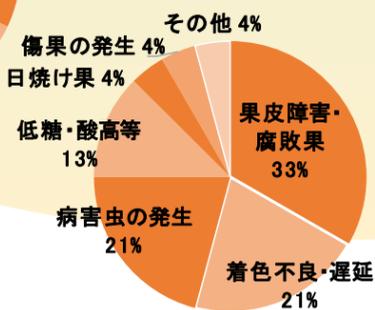
生産者が最も深刻に捉えている気候変動の影響

対象：愛媛県内の柑橘類生産者66名
 取扱品種21種：温州みかん(5)、中晩柑(16)

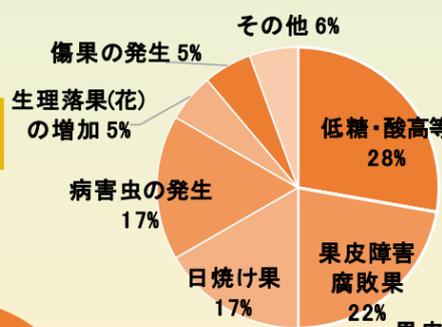
温州みかん



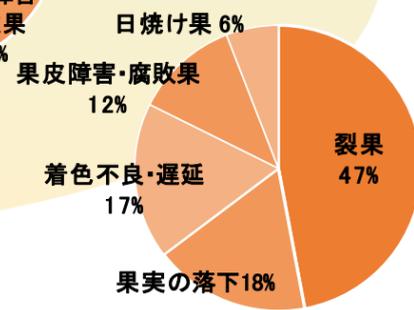
伊予柑



愛媛果試第28号 (紅まどんな)



甘平



柑橘類の気候変動影響に対する適応策の実例

シートマルチの敷設

適切な時期にシートマルチを敷設すると、多雨による糖度の低下や裂果、浮皮や着色不良の対策となります。



低糖対策

裂果の発生防止

浮皮果の発生軽減

着色不良対策

豪雨災害からの復興

地球温暖化の影響を受けたとされる平成30年7月豪雨により被害を受けた樹園地に対し、現地の地形や被災状況、地域の意向等に基づき、より災害に強く生産性の高い樹園地に復旧。



災害からの復興

園地の防災・減災

甘平のシートマルチ栽培の様子：愛媛県農林水産研究所果樹研究センター

樹園地復旧の様子（宇和島市）：愛媛県農地整備課

<愛媛県気候変動適応センター>

住所：〒791-0211 愛媛県東温市見奈良1545番地4（愛媛県立衛生環境研究所内）
 TEL：089-948-9678 / FAX：089-948-9539
 MAIL：kikoutekiou-cnt@pref.ehime.lg.jp
 URL：https://www.pref.ehime.jp/h25115/kikouhenndoug020402.html



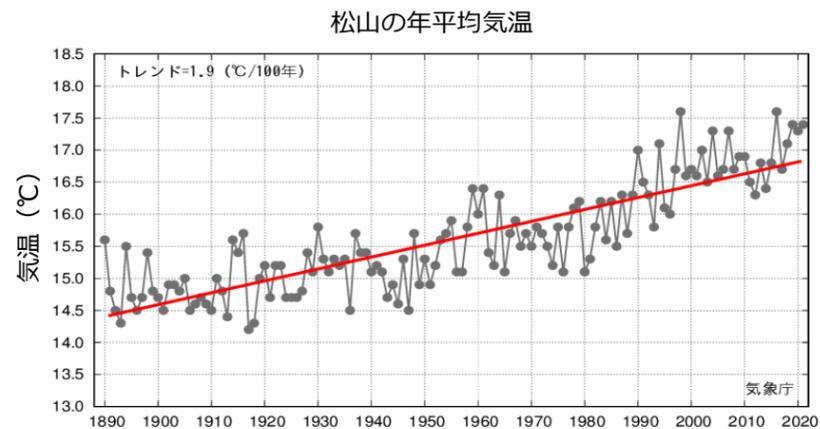
このリーフレットは、「環境省令和4年度国民参加による気候変動情報収集・分析委託業務（愛媛県）」により作成したものです。

愛媛県



年平均気温の長期的な変化（愛媛県）

松山の年平均気温は、100年あたり約1.9℃（統計期間：1890～2021年）の割合で上昇しています。これには都市化の影響が含まれますが、日本の平均気温の上昇（100年あたり約1.2℃）より高くなっています。



柑橘類の栽培適地はどう変わっていくのか？

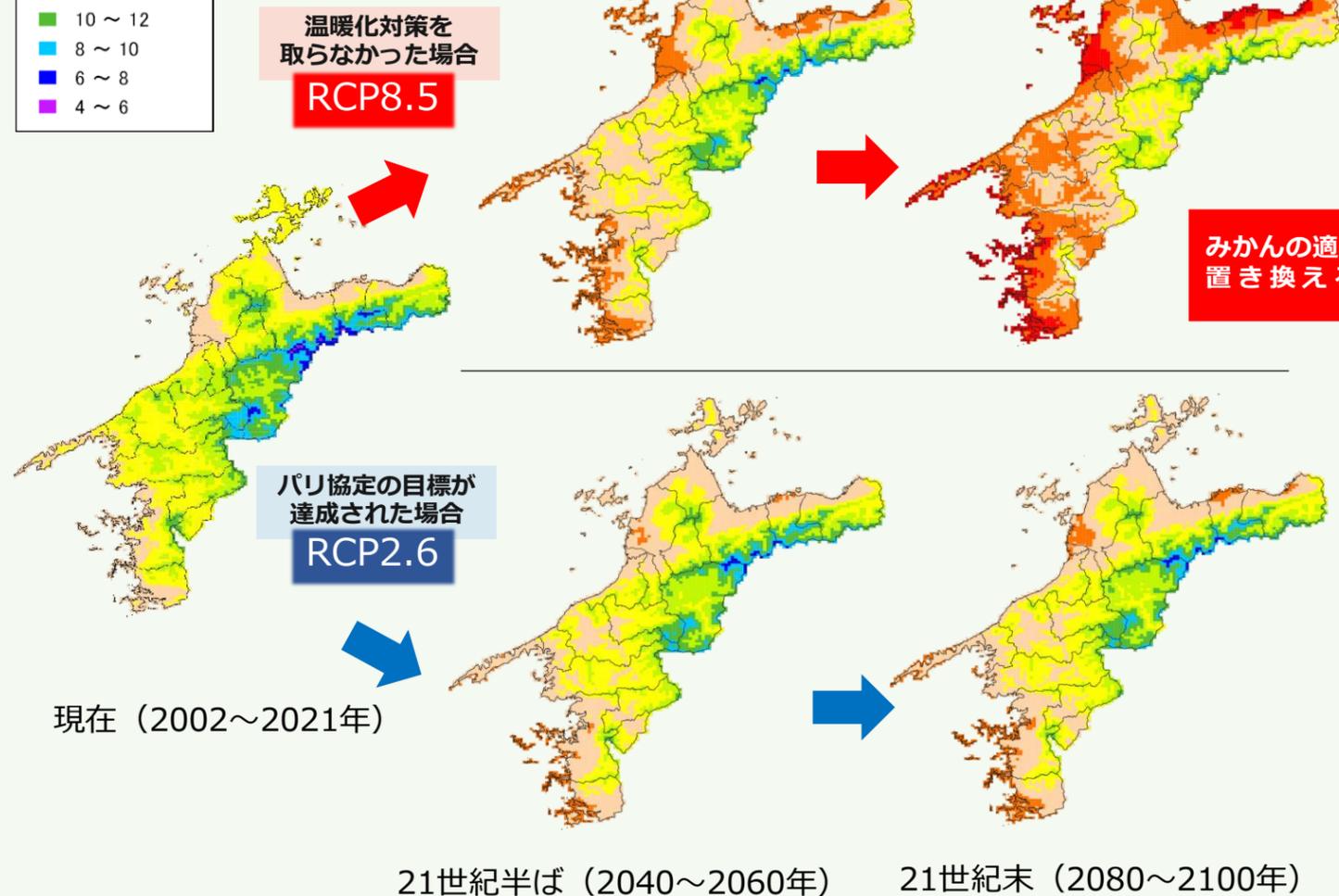
将来の年平均気温の変化

21世紀末頃の愛媛県における平均気温は、**温暖化対策を取らなかった場合（RCP8.5）**には、**現在と比べて3.0～4.0℃上昇**、**パリ協定の2℃目標が達成された場合（RCP2.6）**には**1.0～1.5℃上昇**すると予測されました。

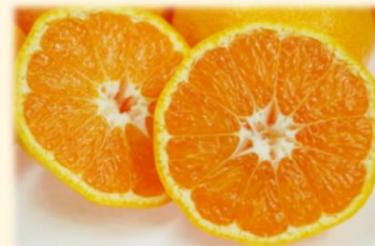
使用したデータ：農研機構地域気候シナリオ2017、全球モデルMIROC5

年平均気温 [°C]

■	20～22
■	18～20
■	16～18
■	14～16
■	12～14
■	10～12
■	8～10
■	6～8
■	4～6

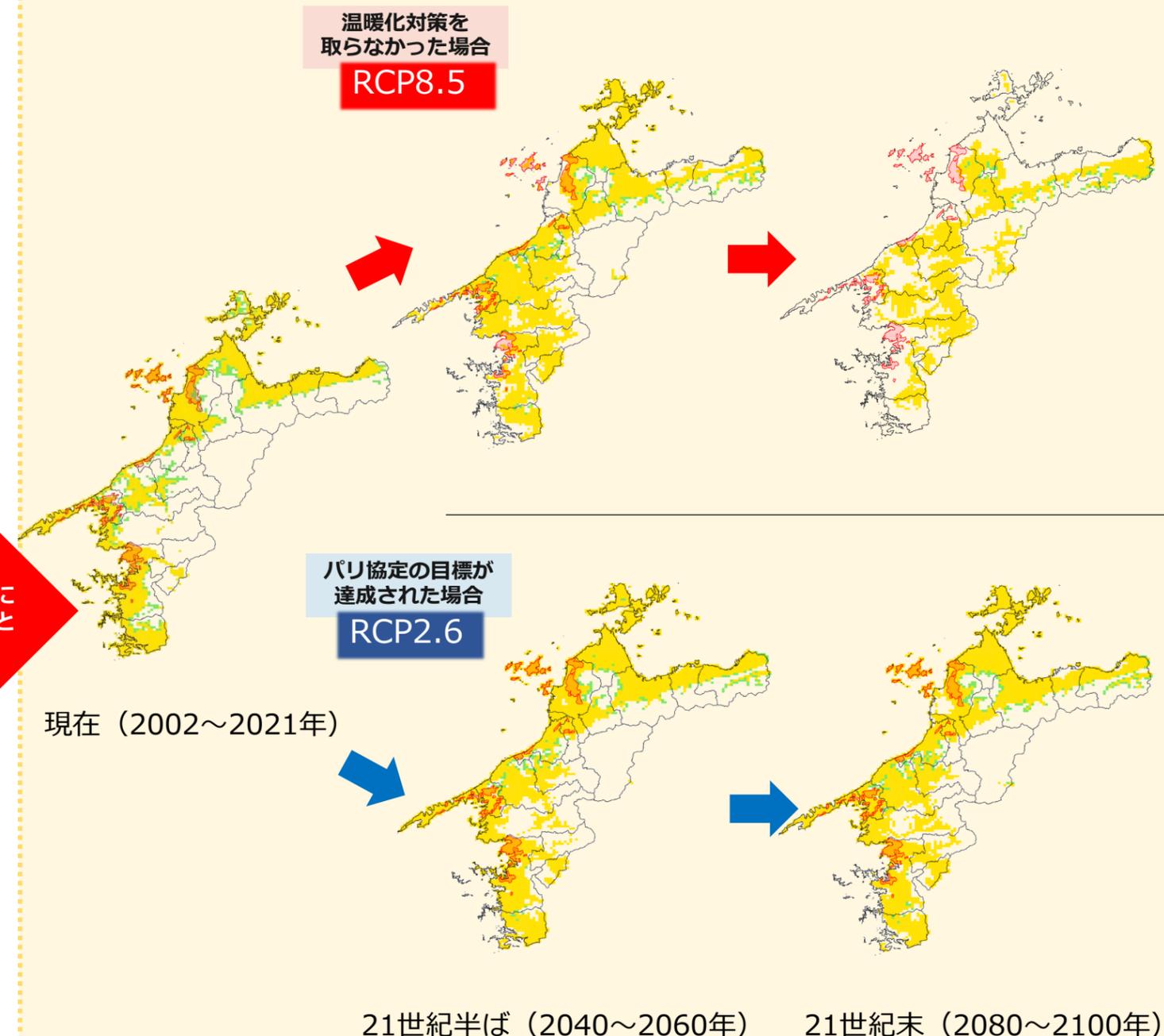


温州みかんの適地に置き換えた結果、**RCP8.5**の21世紀末では、気温の上昇により**現在の栽培場所の大部分が栽培適地から外れ、標高の高いところが適地**となり、**RCP2.6**の21世紀末では、**現在の栽培場所のほとんどは栽培適地のまま維持される結果**※1となった。



	年平均気温	年最低気温
栽培適地	15℃以上 18℃以下	-5℃以上
準栽培適地	14.4℃以上 15℃未満	-5℃以上

■ 主要な栽培場所※2 ■ 栽培適地※3 ■ 準栽培適地※4



※1 気温条件のみによる適地判断であり、他の環境条件、社会的条件等を考慮していない
 ※2 愛媛県気候変動適応センターが実施したJAへのヒアリングにより確認した、令和4年5月現在の主要な温州みかんの生産場所
 ※3 「果樹農業の振興を図るための基本方針（果樹農業振興基本方針）」（農林水産省 令和2年）に定められた「栽培に適する自然的条件に関する基準」及びモデルを用いて再現した栽培適地
 ※4 適地判断の条件を、「栽培適地より気温が低いが、実際に温州みかんが栽培されている地域の年平均気温」まで上げた範囲